

関西大学史展を振り返って

福井智佳子

はじめに

平成九年十月三十日から平成十年一月二十九日まで、

新関西大学会館北棟の一階アートギャラリーにおいて、

『関西大学史展―千里山・天六時代―』を開催した。こ

れは、平成九年二月十一日に開催した『関西大学創設期

展』のあとを受ける内容のもので、それに続く創立百周

年までの歴史をテーマにしたものである。この二回の展

示で、本学の歴史が把握でき、昭和六十年から平成八年

まで順次刊行された『関西大学百年史』とあわせて、その全貌が立体的に表現されたといつていいだろう。ここで、担当者の視点からこの展示を振り返り、報告をまとめたい。

一、展示まで

打合せ会での調整

前回の「創設期展」を企画した際、大学の歴史を二分割して展示することが決定していたため、具体的な案は、

前の展示を開催した時にすでにおおまかにできあがっていた。前の展示作業で手順も把握できていたので、全体を通してスムーズに作業できたといっているだろう。

アートギャラリーは、平成八年十月二十八日、新関西

大学会館の中に新設された。ここでの展示は、運営担当者会によって企画の検討等を行っている。今回の展示は、開設から数えて次表のようになるが、いままで図書館、博物館、年史室が実施している。

回	展 示	担 当 部 署	期 間
1	関西大学図書館所蔵文書展 戦国武将の書状	図書館	平成八年十月二十八日～十二月二十日
2	関西大学創設期展―関西法律学校の創立から福島時代の関西大学まで	年史資料編集室	平成九年一月二十九日～四月三十日
3	日印共同調査展	博物館	平成九年四月六日～平成十年三月三十日
4	北條秀司回顧展	図書館	平成九年五月六日～六月三十日
5	関西大学史展―千里山・天六時代	年史資料編集室	平成九年十月三十日～平成十年一月二十九日
6	「絵入り本の系譜」展	図書館	平成十年四月一日～五月三十日
7	工学部建築学科研究(課題発表)	工学部	平成十年九月三十日～十月七日
8	いしいひさいち展	図書館	平成十年十月十二日～十一月七日
9	関西大学墨跡展	年史資料編集室	平成十年十一月十一日～十二月十九日

『大学史展』開催についての打合せは平成九年五月二十七日に開催し、企画提出・日程調整を行った。平成九年度は春に図書館が展示を行ったため、秋は年史室で、という話であったが、十月六日の第二回打合せ会で正式に十月三十日開催と決定した。すでに春あたりから徐々に準備を進めていたため、開催まで三週間という短い作業期間でも特に問題はなかった。

準備作業

準備作業は前回同様、大学の歴史をわかりやすくするための工夫に最大限の時間を割いたといっている。構成はケースごとに時代を分け、その時代の説明パネルを作成し、印象的な写真を引き伸ばして、見る人のイメージを引き出す工夫を考えた。

今回も展示準備をしながら保存作業も行うという方法で作業をすすめていった。展示品によつては、新たに帙を作成する必要のあるものもあった。その他、写真やポスターなどは、額縁にいれて保存するという形式にした。

額装保存は、整理しやすいこと、資料に直接触れずにするむことと、そのまま展示にも対応できる点が長所である。また、昭和二十年八月十五日に発行された、終戦の日の新聞も今回展示を行ったが、この資料はラミネート加工を施した。ラミネートに関しては、資料形態が変化してしまうこと等、資料からみると問題点もある。しかし、新聞などの紙質では、長期保存には耐えられず、この終戦新聞も劣化が著しく、これ以上の酸化をくい止めるために処理を行った。



ケース全景 (第2ケース)

紙の劣化に関しては、資料保存の最大の課題といえる。虫食いと劣化の克服は年史担当者の使命といってもいいくらいなのだが、いまだ格闘中である我々にとって大きな悩みである。このことは後述するが、今回の展示品でも、特に戦時中の紙がひどく痛んでいた。市販している劣化防止製品などあるが、時間と予算の関係もあり対策に苦慮した。

展示品候補がかたまると一覧表を作成した。この表は展示品の照合や収納場所の確認にも使用した。

展示作業は、アートギャラリーと事務室の往復となったが、十月は気候がおちついているため、湿度の心配もなく速やかに行えた。しかし、新築後一年が経過したとはいえ、新関西大学会館自体の湿気が抜けきれていないため、展示ケース内の湿度調整には気を使った。今回はシリカゲル（乾燥剤『ドライヤーン』、発売元・山仁薬品株式会社）を使用した。この製品は湿度を除去するだけではなく、湿度の変化によって再び吸収した湿気を放出するといったように、空気内の湿度を調整するので、

一度配置したのちは、展示終了までそのままよかった。説明キャプションは要領よく簡潔な文を作成することに注意を払った。あまり文字を多くすると、見る人が疲れてしまうのだが、展示内容が理解できないと意味がないからである。前回は見学者から文字が小さいなどの意見が出されたため改善に努めた。

二、展示品について

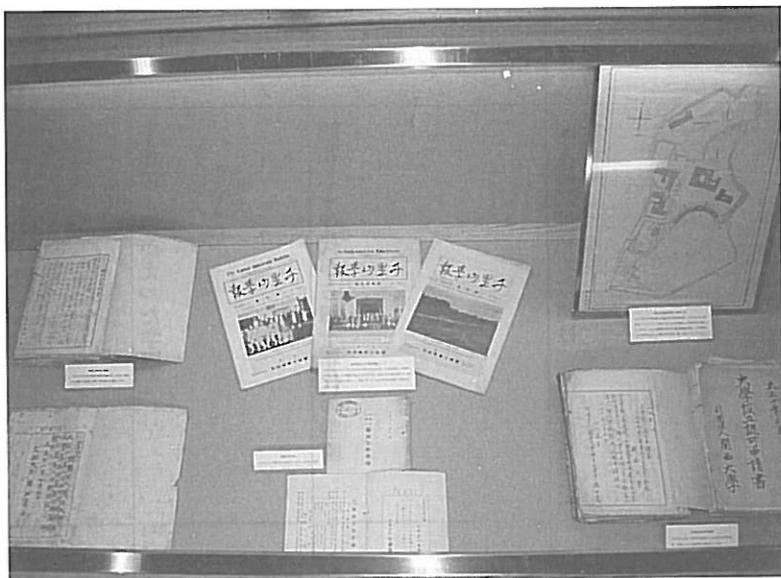
こうして開催するにいたったのだが、大学が現在の姿になっていくまでの資料、即ち、文部省へ提出する文書や短期大学部設置申請書類など、大学の歴史を知るうえで重要かつ印象的なものも多く含まれている。展示品については左表のとおりである。

第一ケースは、私立大学への第一歩とも言うべき大学昇格への動きを、文部省に提出した認可申請書を中心に展示した。

ケース 番号	テーマ	展 示 物
1	大学昇格の機運と千里山学舎の建設	<ul style="list-style-type: none"> ・「大学設立認可申請書」（大正十年二月に文部省に提出した大学設立認可申請書） ・「関西大学基本財産供託受領証」（基本財産六十万円の六カ年分割供託に関する認可書） ・「大学令ニ據ル関西大学学則」（大正十二年二月、大学昇格後に初めて出された学則） ・創刊当初の『千里山学報』（創刊号〜三号まで展示） ・千里山学舎構内要図（昭和二年三月に作成された千里山キャンパスの地図） ・建設中の千里山予科校舎（写真） ・「財団法人関西大学寄附行為原簿」（大正八年十二月の社団法人解散手続・財団法人設立手続）
2	「学の実化」とカレッジライフの展開	<ul style="list-style-type: none"> ・第一回大学祭の入場門（写真） ・「学の実化」講座の様子（写真） ・「学の実化」講座来学講師芳名録（大正十二年四月に来学した犬養毅（木堂）の墨跡） ・第二回大学祭案内状（昭和二年十月十五日付で校友に送られた第二回大学祭の案内状） ・第十回大学祭のポスター ・画家・鳥海青児が製作した木版画「日覆をおろす男」 ・関西大学門標（昭和四年に竣工した天六学舎に掲げられていたもの） ・優等弁論記念杯、メダル・バッジ・ペンダントほか ・学長賞記念メダル（学友会新聞部が受賞） ・弁論部のバッジ、学友会幹事、文芸部、新聞部の襟章
3	花開くスポーツ関大	<ul style="list-style-type: none"> ・大島鎌吉（ロス五輪・三段跳び銅メダリスト）のジャンプ（写真） ・竹田繁七の学生横綱提灯行列（写真）

3	4	5
<ul style="list-style-type: none"> ・野球部第一次ハワイ遠征ポスター(昭和八年) ・専門部運動部長の感謝状(専門部運動部長(可野敬四郎)が野球部(辻雄二)に出した感謝状) ・倉光安峯氏色紙(テニスのデビスカップ杯に出場) ・日章旗寄せ書き(大島鎌吉と谷口陸生の渡欧記念寄せ書き、昭和十四年六月九日付) 	<p>創立五十周年記念式典</p>	<p>戦時下の学生生活</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・野球部第一次ハワイ遠征ポスター(昭和八年) ・専門部運動部長の感謝状(専門部運動部長(可野敬四郎)が野球部(辻雄二)に出した感謝状) ・倉光安峯氏色紙(テニスのデビスカップ杯に出場) ・日章旗寄せ書き(大島鎌吉と谷口陸生の渡欧記念寄せ書き、昭和十四年六月九日付) 	<p>創立五十周年記念祝賀会風景(写真)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『関西大学創立五十年史』 ・『関西大学創立五十年記念論文集』(昭和十一年発行) ・『関西大学報創立五十年記念号』(昭和十一年発行) ・『関西大学創立五十周年記念絵はがき』(烏海青児作) ・『背光』(学友会新聞部が創立五十周年を記念して発行した特別号) ・『背光』(直筆原稿スクラップ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・報国団の行進(写真) ・報国団団則と報国隊結成に関する通牒 ・勤労奉仕の時に貸与した水筒(戦時下、勤労奉仕で出勤した学生に大が貸与) ・建物借上契約書(中部第七四三七部隊の駐留に伴う千里山学舎借上契約書) ・校舎建物借上停止に関する連絡文書(終戦に伴い、中部軍と本学の間で取り交わされた千里山学舎の借上契約が解除されたことを通知する文書) ・学校防空指針(敵機来襲に備えて学校がとるべき自衛防空・校外防空の指針) ・仮卒業証書(徴兵猶予の停止に伴い徴兵された学生に出された仮卒業証書) ・学士試験合格証書(修業年限短縮に伴い六カ月の繰り上げ卒業を示す証書)

6	<p>平和のよみがえった学園</p>	<ul style="list-style-type: none"> 予科生たちの墨跡集（予科生たちが学徒出陣直前に書ききしたノート） 戦地だより（出兵した校友たちが校友会に宛てた戦地からのたより） 終戦の日の新聞 戦後第一回の大学祭（写真） 応援団のぼり（戦後第二代と第三代の応援団員の署名入り） 図書館学講習所修了証書（第一回図書館学講習所の修了証書・昭和二十四年十一月十二日付） 関西大学短期大学部設置要項（昭和二十五年四月、短期大学部開設のための設置申請書類）
7	<p>昭和三十年代から四十年代の学園</p>	<ul style="list-style-type: none"> 創立七十周年記念式典外国大学のメッセージ 第一学舎定礎拓本 工学部学生募集要項（昭和三十三年度） 関西大学讃歌額（北条秀司作詞、清水脩作曲の讃歌） 野球部全国優勝記念ペナント（昭和四十七年、第二十一回全日本大学野球選手権大会優勝記念ペナント） 野球部に対する記者クラブ賞状（昭和四十七年度の活躍に対し関西運動記者クラブから野球部に贈られた）
8	<p>関大第二世紀の幕開け 創立百周年記念式典</p>	<ul style="list-style-type: none"> 創立百周年記念式典（写真） 創立百周年記念ビデオ（二巻「燃ゆる関西大学」「関西大学 風雪の歴史」） 内藤湖南色紙（複製） 司馬遼太郎色紙（百周年記念会館の竣工記念に開催された国際シンポジウムに出席） キャラクターデッサン画（記念事業の一環として制定）



第2ケース

第一次世界大戦後は各国で新しい教育運動が起り、今までにない教育改革の機運が生まれた。わが国においても、大正五年に岡田良平が文部大臣に就任すると同時に、かねてからの学制改革に着手した。そして大正七年に「大学令」が公布され、専門学校としての位置づけだった私立大学は歴史的な第一歩を踏み出した。

展示品のひとつである「関西大学基本財産供託受領証」は、大学令の特徴をあらわす資料のひとつといえよう。これは、大学認可申請の条件として、大学を設置しようとする財団には、文部省へ基本財産を供託することが義務づけられていたのである。その金額も一校ごとに五十万円、さらに学部を一部増すごとに十万円加算されるものだった。本学では基本財産六十万円を六年にわたって分割供託することが認可されており、そのことが資料からみとれる。

このように、その時代の印象的な資料から、当時の空気が伝わるように心掛けた。今回は大正から現在まで、七十年余のあゆみを限られたスペースで表さなければなら

らず、資料の選択には苦慮した。各資料にそれぞれのエピソードがあり、当時の様子をできるだけ詳しく伝えたいという思いは大きかった。しかし、見学者にいかにも簡潔に大学の歴史を伝えるかという視点で資料を見た時、どうしても取捨選択し直さなければならぬものもあり、展示の難しさを実感した。

戦時下の学生生活

今回、第二次世界大戦下の大学についての展示は、第



パネルにした報国隊の写真と説明文

五ケースひとつをあてた。テーマを「戦時下の学生生活」とし、当時の大学の状況を詳細に説明した。この時期の資料は年史室に比較的多くあり、説明キャプションを少なくして資料を多く展示するよう配慮した。

昭和六年の満州事変以後、日本の文教政策は次第に戦争の影響を受けるようになり、昭和十二年の日華事変からはさらに拍車がかかった。文部省は昭和十五年、全国の各学校に学徒修練体制の整備を示唆、これを受けて本学でも、昭和十六年に学友会が報国団、さらに報国隊へと組織改編を行っている。さらに、戦局の激化に伴って予科、専門部、大学学部生の修業年限が三カ月間短縮され、昭和十八年十二月に、理工科系統および教員養成諸学校の学生を除く一般学生には学徒出陣が決定するのである。

第五ケースでは、文部省や軍部からの通牒などの文書類と、勤労働員に出かける学生たちに本学が貸与した水筒や別れの遺墨集などの物品類を両方展示した。このケースでは、資料が相互にその意味を説明しあい、担当者

がつけた解説より多くのことを見る人に語りかけたためだろうか、見学者の反応は大きかった。特に学生たちにとっては、五十年前、自分と同じ年齢の学生がさまざまな思いを胸に、戦地に赴いた事実を目の当たりにし、展示室に設置した芳名録に、その思いを書き連ねる姿もあった。

展示開催のPRについては、『関西大学通信』や校友会の機関紙『関大』等に案内を載せ、その周知をはかった。また、産経新聞社と朝日新聞社からも取材を受けた。朝日新聞社からは、展示品の一つである戦地に赴いた学生からの往復書簡について、調査を行いたいという要請があり、関係資料を貸し出したりもした。

見学者の反応

約二カ月の開催期間中に学生や校友をはじめ、多くの見学者が訪れた。この間、学園祭や入学試験の願書受付などの行事をはさんだこともあって、受験生も見学に訪れた。

前回の「創設期展」では、担当者が定期的に巡回して目録の補充や展示室の点検を行った。今回も同様の手順で見回りをしたのだが、学園祭の時は、地域住民の方や他大学の学生も多く訪れるため、この期間中は担当者が会場で質問を受け付けるとともに、簡単な説明も行った。見学者総数については、目録の発行部数で概算している。今回は四二九部発行したので、だいたい四五〇名から五〇〇名ほどの方が見学に訪れたと見ている。

設置していた芳名録にも多くの方が記帳し、関西大学への思いをそれぞれ綴っていた。学園祭の折、久し振りに母校を訪れた校友は建物など大きく変わった母校と活気ある学生たちの様子に、驚きと懐かしさを感じていた様子だった。なかには「祖父の学んだ学舎で孫が学ぶことの縁を感じます」と書かれた見学者もいて、担当者として、改めて歴史の重さを実感したものだ。

アートギャラリーには学外だけでなく、学内の教職員も多く訪れた。学内部署の学事一課からは、大正十年二月の大学設置認可申請書と昭和二十四年十月の関西大学

短期大学部設置・認可申請書、また財務局からは、昭和初期以降の金銭出納帳一式の資料移管を受けた。また、学外からも数点の資料寄贈を受けた。前回の展示でも、開催後に資料や年史関連の情報等、多くの提供を受けたように、「展示」という大学の歴史を目に見える形にすることで、散逸していた資料が、まるで呼応しあうかのようにに大学へ集まってくる。このことは、年史担当者として大きな喜びであった。

三、課題と展望

年史資料常設の必要性

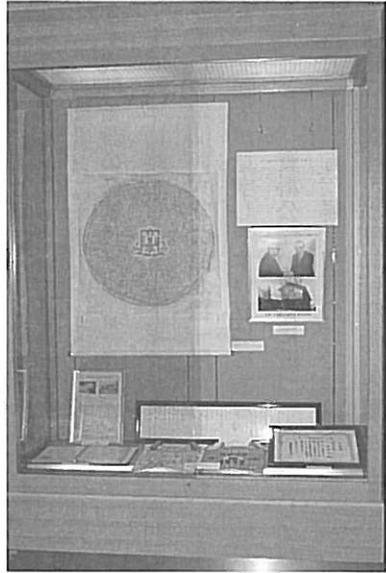
平成八年に竣工したアートギャラリーは、正門の役割を果たす新関西大学会館北棟一階にあるため、学生や校友、受験生が見学しやすい立地にある。ここで展示を行ったことは、資料公開の目標に近づいたと感している。担当者としても、展示技術の点で学ぶことが多かった。一般に「資料」と呼ぶものは、公開し、そこに何らか

の意義が生まれたとき、初めて「資料」となる性質をもつ。「もの」を「資料」たらしめるのは公開という作業以外には考えられない。一義的な資料などあり得ず、多くの目に触れることで資料はより多くの意義をもつ。現在、年史室は常設展示のできるスペースを持っていないが、資料を活用する場としての展示室は、近い将来、必要となってくるだろう。

なおアートギャラリーは、平成十年末、学内設備の改築に伴い閉室された。展示ケース等は南棟一階ロビーへ



第6ケース



第7ケース

移設され、以後は、展示コーナーとしてその機能を引き継ぐこととなった。平成十一年一月現在、運営方針等については調整中であるが、今後も年史資料の公開の場として利用していきたいと考えている。

急務となった資料保存体系の見直し

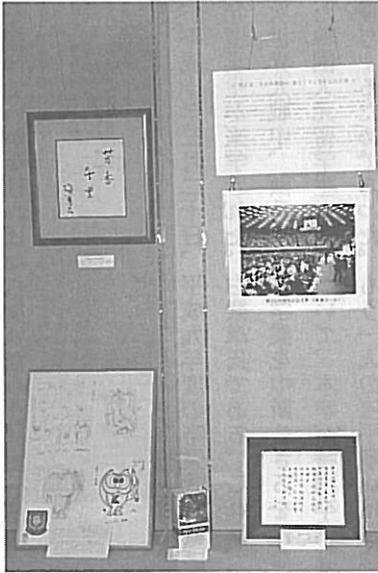
今回は担当者として二回目の展示とあって、ほぼ支障なく作業を進めることができた。しかし、作業の中で大きく時間を割いたのが資料の選別であったことは、年史

室の課題を裏付けることでもあった。選別に時間がかかった原因の一つに、貴重品目録の未整備があげられる。資料の受入れ台帳ならびに貴重品台帳は作っているが、それだけで全てを検索できるかといえば、否と言わざるを得ない。担当者の記憶に頼っているのが現状である。こういった状況は、概ねどの大学でも同じであり、長年の経験が、年史業務を支えてきたことはまぎれもない事実である。しかし、資料の多様化、増え続ける資料に対して、何らかの対処法を検討する時期にきていることも、また事実なのだ。

大学によっては、コンピュータを利用してデータベース化を進め、資料の体系化を行っているところがある。本学も、この問題に対して数年前から取り組んできているが、なかなか軌道に乗っていない。しかし、コンピュータの普及や、検索ソフトの充実等によって、この問題を解決できる時期が近づきつつあるとあっていいだろう。長年の経験と資料のデータベース化により、大学の歴史をさらに鮮明に表すことができるに違いない。

戦時資料の保存

今回、もう一つ担当者を悩ませたのは、資料の劣化である。特に、紙の質がわるい昭和初期から第二次世界大戦中の資料は、紙片化（紙が端や折り目から強度が失われて崩れていくこと）が進み、放置すれば資料そのものが粉々になる恐れがあつた。展示終了後、専門業者に依頼し補修作業を行ったため、劣化はある程度防げたが、劣化の進む資料すべてを補修したわけではなく、できるだけ迅速な手当てが必要である。少なくとも、年史担当



第8ケース

者レベルでの応急処置は急務である。

では、どのような処置ができるのか。紙の劣化はそれを「酸化」と言い換えられるほど、空気にふれると紙は痛んでいく。日本では大正時代ごろから洋紙が普及し、和紙に墨で筆記する様式から洋紙にインクで筆記するかたちになった。日本に導入された洋紙は、インクのにじみ止めに強酸性化学物質が使用されたため、空気にふれると化学変化を起こし、酸化するのである。

担当者レベルでの応急処置、すなわち、市販している劣化防止製品を使うやり方の一つとして、中性紙を使用した文書箱や封筒を利用し、外気から遮断する方法がある。また、ゆるやかな効果ながら、コピー用紙（PPC用紙。中性紙でできているため、酸化しにくい）を挟み込む方法もあげられる。

今回は私自身、特に、資料整理・保存技術に関して、アーキビストとしての知識と能力を向上させなければならぬことを痛感した。試行錯誤を繰り返しながらも、学内外の情報交換を活発にし、最良の年史資料のあり方

を探っていかなければならぬだろう。

おわりに

平成十年三月二十日、平成九年度の卒業式に韓国から元留学生が来学された。白樂準氏である。これは、第二次世界大戦中、徴兵され、学業を中断せざるを得なかった韓国人元留学生二人について、本学が特別卒業証書を授与するためであった。もう一人の玄平孝氏は残念ながら病気のため式には出席されず、白氏のみが半世紀ぶりに母校を訪れ、証書を手にされた。

白氏は、昭和十八年、専門部第二部法律本科に入学生だが、朝鮮・台湾籍学生を対象とした「陸軍特別志願兵臨時採用規則」により翌年休学。終戦をソウルで迎え、復学することなく現在に至ったという。白氏のように、同じ経緯で除籍となった留学生は二十二名にのぼるといわれている。

私はこのことで、今回の展示の際に戦時資料から受け

た感想を芳名録に記した学生のことを思い出した。「学徒出陣された学生の手紙等から、当時の学生の真剣な人生哲学・学研追究が感じとられ感激しました」としたためた学生は、これをどう捉え、なにを感じただろう、と。年史室に残る戦時資料のなかで、当時の留学生関連資料は皆無に近い。戦時中だけではない。戦後の混乱期にかけての文書や教職員名簿、学生名簿などをはじめ、長い歴史を物語る資料群のなかに、ジグソーパズルのピースが足りないように空白の時期がいくつかある。その空白がいくつあるのかも的確には把握できていない。年史資料が散逸していることを理由に、大学の歴史を正確に伝えられないことがあつてはならない。この空白にどのように立ち向かい、空白をいかに埋めていくかが、年史担当者としての課題であり、使命であろう。年史資料から一つでも多くの史実を引き出し、いかに大学史を多面的に捉えられるか、今後も資料と対話しながら学んでいきたい。

(ふくいちかこII 出版部出版課主事補)